

す。このような現象を熱源と考えることはきわめてあり得ることのようです。他のどの領域でも酸素原子の型で、化学的エネルギーが直接に熱になることはなく、この領域独特なものです。

3. 結 び

これまでのお話は気象学者が見た超高層大気のあらすじでした。現在研究中的のもっと他の興味あることとお話すべき時間を持ちたかったのですが、成層圏内の一般的風系とそれらが冬にいか突然に変わるかについてお話しました。エネルギーを下部大気圏からはこぶ熱圏内の

波動運動と冬期の極地上の大気中の不思議な熱源についてお話ししました。

これらは我々が見出したもののわずかな特徴にすぎません。我々の主要な結論はこうです。大気は一つの完全な組織体であり、全体を理解しようと望む前に上部がどのように振舞うかを理解することを学ばねばならないということです。

終りに皆様にお話する機会に恵まれましたことをいかに喜んでいのかを申し述べ、将来何回となく東京と東京大学を訪れることができることを望みます。

理 事 会 だ よ り

第1回(第14期)全国理事会

日 時: 昭和41年10月1日 19h~20h30m

場 所: 北大, クラーク会館

出席者: 常任理事, 北岡, 三宅, 神山, 吉野, 須田(滝)

地方理事, 孫野, 山元

監 事, 高橋(順不同)

(他に評議員荒川, 中野各氏出席)

(注, 今回の全国理事会は8月21日に開かれた全国理事会が定数不足であったので, 同じ議題について当時出席しなかった理事の審議を願いかつ前回と併せて, 1回の全国理事会とすることの諒承を得たものである。)

議 決

1. 気象学会の運営方針について

北岡理事長代理より従来の経緯の説明があり, 主要事項について審議した。決定した事項は次のとおり。

(1) 全国理事会の開催

年4回(8月, 3月および春秋の大会前に2回)開くこととし, 運営は重要問題の実質的討議を行うこと。開催の約1ヶ月前に予告すること。当分旅費の支給がなくとも止むを得ないことなどが決った。

(2) 運営に関するシンポジウムの開催

運営問題については, 今後も種々の機会に討議する必要がある。シンポジウムの開催もよいが, 更に経済問題などから検討し, 具体的な資料が整ってから開くことになった。

(3) とりあえず10月2日, 臨時総会終了後に運営問題に関心を持つ会員に集ってもらい, Informal Meetingの形で, 意見交換を行うことになった。

2. GARP 計画の推進について

これが推進方法の1つとして, 臨時総会に提出し, 会員の賛成を得るよう取り運ぶことを了承。

主な討議

運営問題については, 各理事の討議が行われたが, 理

事会としては, この機会に評議員, 監事のご意見も伺って, 今後の改善に資することにした。

参考のために主な討議を掲げる。

(1) 会員の種類と権利について

学会の発展のためには, 全員集誌をとる会員になることが望ましいが, そうならない場合, 権利について多少差別をしてもよいのではないかという意見もあったが, 現状から見ると, 反って学会発展のためにならない。差別している学会もあるが, 日本では差別していない学会が多い。天気だけの会員も気象学や技術の進歩にとって大切である。会員の減少を来し, 経済的基盤を弱めるおそれがある。などの反論があった。

なお「天気」をアメリカ気象学会の Applied Met. のようなものにして集誌をとる会員も天気だけとる会員も同等にすることも検討すべきであるとの意見もあった。学生会員の会費について優遇することは多少問題もあるが, 将来の気象学を背負う者を育成する姿勢としてよいことであろうとの意見が多かった。この場合, 会費は将来値上げするときに, 学生は上げないという方法がよい会費を安くした場合は選挙, 被選挙などの権利の制限は止むを得ないのではないか, そして学生には, 一般会員が学生会員か好むところを選べるようにすればよい。などの意見が出た。

(2) 選挙方法について

選挙の方法には改善すべき点もあるとの意見が多かった。地方区については, 廃止しないで, 地方理事の定数を増してはどうかの意見もあったが, 廃止すべきであるとの論もあった。いづれにしても事務局の強化が大切だがこれは直に経費の問題にぶつかり, 簡単に行かない事情も説明された。

(3) 会員への周知について

できるだけ多くの機会をとらえ, 会員に実情を伝え, 意見をあつめるよう努力する。

1966年11月